

ミヤコタナゴの人工採苗に関する研究－Ⅰ 採卵回数、採卵数および採卵間隔（要旨）

岡 彬・菅生 裕

当場では、国指定天然記念物ミヤコタナゴ *Tanakia tanago* の保護増殖を図るため、昭和54年度から毎年、屋外コンクリート池を利用して繁殖試験を実施し、稚魚の確保に努めている。

タナゴ類は一般に淡水産二枚貝の鰓葉内に産卵することが知られているが、ミヤコタナゴの繁殖試験では飼育池にマツカサガイを入れ、これに自然産卵させる方法をとっている。

しかし、最近、マツカサガイの入手が困難となり、また、他の二枚貝も適当なものがみつからないことから、二枚貝を用いない人工採苗法の確立が望まれている。

本試験では、個体識別を行ったミヤコタナゴの親魚を用いて人工的に採卵し、採卵回数、採卵数、採卵間隔等を調べるとともに人工採卵、人工授精の可否について検討した。

なお、本研究の結果については、昭和58年度日本水産学会春季大会において発表済みであるので、ここでは要旨のみ記載する。

1. 供試雌魚6尾中5尾から採卵することができ、試験期間中の延べ採卵回数は35回、総採卵数は362粒であった。
2. 1尾の1回当り採卵数は5～9粒に大半が集中しており、最少で5粒、最多で40粒、平均では10.3粒であった。
3. 採卵間隔（産卵管の伸長間隔）は4～30日であったが、5～7日間隔の回数が全回数の60%を占めていた。
4. 受精からふ化までは水温22℃で3日を要し、ふ化率の平均は63.5%であった。また、ふ化から浮上までは23日程度を要した。